

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

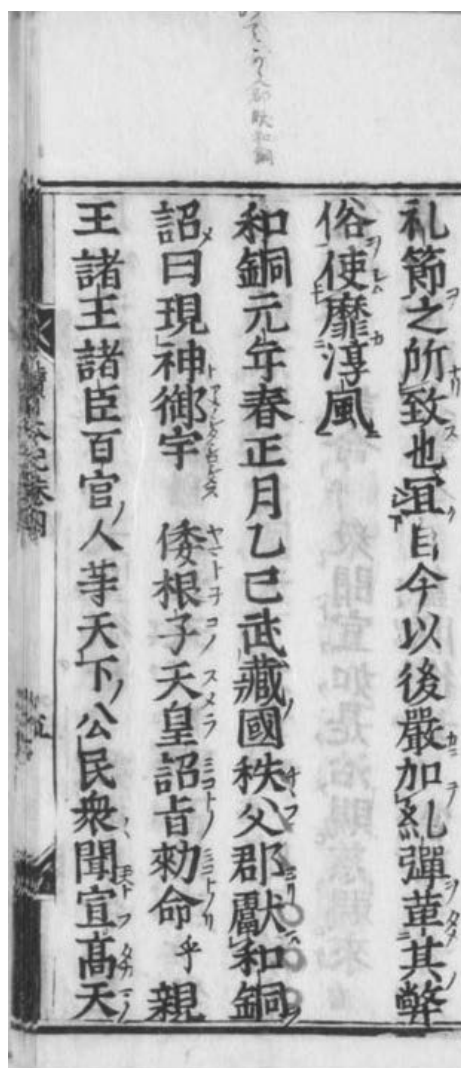
al museo

2019年12月20日

No.130

もくじ

- 1-2 改元を考える
その参〈和銅〉改元
…武蔵国府も一役?!
- 3 最近の発掘調査
朝鮮半島、百済地域
との関係がうかがえ
る土器
- 4-5 NOTE
浅野長政と中世
土豪の屋敷
- 6 府中の身近な昆虫絵巻
⑦テントウムシの冬
眠と夏眠
- 7 展示会案内 特別展
ご臨終〜江戸時代の
死・病・あの世
- 8 平成史に残る天文・宇宙
イベント
③二度の火星大接
近!



『続日本紀』
(江戸時代刊本「武蔵総社文庫」)

改元を考える

平成から令和へ。新しい時代の幕開けだと世の中は少しウキウキしているようです。時代によって人びとの〈改元〉に寄せる思いは異なっていました。地域に残るモノをとおして、〈改元〉について4回シリーズで考えます。

その参

〈和銅〉改元

…武蔵国府も一役?!

左写真は、『続日本紀』の和銅元年（708）正月乙巳（11日）条の書出し部分です。武蔵国秩父郡から和銅が献上され、これを慶事として「和銅」に改元されました。当時の地方行政のシステムからすれば、和銅は武蔵国府によって朝廷に献上されたはず。武蔵国府が改元につながる慶事をもたらしたといえます。

改元を考える

その参…

和銅改元・・・

武蔵国府も一役?!

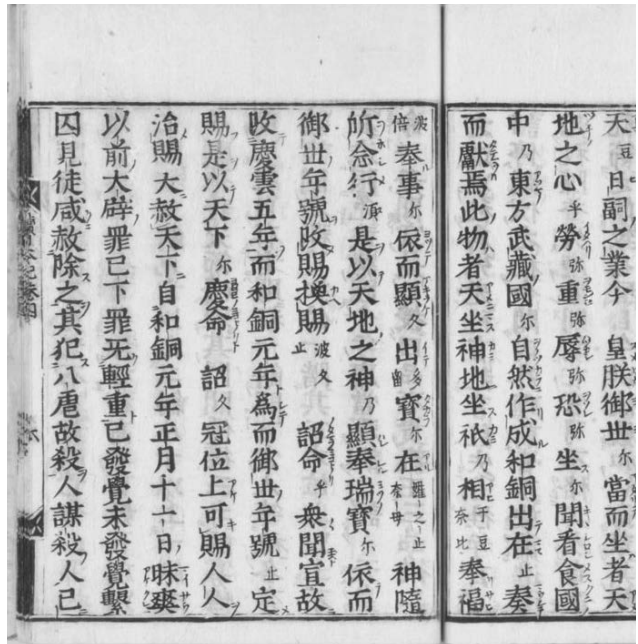
前号まで、朝廷が定めていない年号が流布する場合のあること、政治権力が改元を無視する場合のあることを紹介しました。ともに、中世東国を舞台とした話題でした。今回は時代を大きくさかのぼり、奈良時代の〈和銅〉改元を取り上げたいと思います。

そもそも改元は、君主の交代や吉事を祝ったり、災害凶事を断ち切ったり、変事が多いとされる年をリセットする、といった理由で行われるものでした。こうした改元の事由は、時代によって傾向が変わりますが、奈良時代に多いのが吉事を寿ぐ目的で行われたものです。吉兆とされる現象をもって新しい年号をたてるという陰陽思想に基づいて、祥瑞改元と呼ばれています。

西暦 708 年の〈和銅〉改元もその一つですが、この改元は武蔵国府が関与したと考えられる点で、国府の置かれたまちとしては注意したい出来事といえます。

まずは、奈良時代の歴史書『続日本紀』を開いてみましょう。この年の正月 11 日条を見ると、朝廷に武蔵国秩父郡より和銅が献上されたことが記されています。さらに、自分（元明天皇）の治世にあたり和銅が献上されたのは、天神地祇による瑞宝と思われるので、それにちなんで〈和銅〉に改元することなど、長々と記されています。銅はふつう、鉱石を製錬してつくられますが、まれに硫化銅が還元・置換されて自然にできることがあり、これを和銅と呼んでいたようです。

こうした和銅の発見、献上を慶事とし、改元さ



『続日本紀』

和銅献上と同時に和銅元年に改められている。

れたのでした。和銅が発見されたのは秩父郡ですが、当時の地方行政のシステムとして、それがいきなり朝廷に献上されるはずはありません。上級官庁である国府を経由して都へと運ばれているとみてよいでしょう。武蔵国府が和銅献上に一役買っていることは間違いありません。

とはいえ、もう少し背景を読む必要があると思います。『続日本紀』をさらにめくってみると、同年 2 月には銭を鑄造する役所（催鑄銭司）を設置し、5 月には銀銭、そして 7 月には銅銭を発行しています。これが和同開珎です。銭貨発行は和銅の発見・献上と一連の出来事なのです。

しかし、銭貨発行に先駆けて、和銅が発見されるなどという偶然は考えにくいのではないのでしょうか。短期間のうちに、うまく事が運びすぎています。和銅発見は虚構ではないか、そんな疑念も浮かびます。これはさすがに言い過ぎだとしても、銭貨発行という国家的な一大プロジェクトをセンセーショナルに盛り上げるため、和銅発見や改元が演出されたことは間違いないでしょう。

だとすれば、中央官庁の官僚がシナリオを描き、武蔵国府を司る役人―国司―もこれに与したのだと想像できます。武蔵国府は、改元のみならず和同開珎発行プロジェクトに大きな役割を果たしたのです。ただ、残念なことに、この時の武蔵国司の首班である守が誰であったのかは明らかではありません。（深澤靖幸）

朝鮮半島、百済地域との

関係がうかがえる土器

宮町三丁目・本町一丁目

府中市ふるさと文化財課

湯瀬

禎彦



鋳付きの須恵器の壺

今回は、過去の府中市内の発掘調査で出土した須恵器の2つの破片の観察により、新たに見いだされた情報を紹介します。須恵器とは、成形に口口を使用し、窖窯で焼成された硬質土器です。その製作技術は、5世紀前半に朝鮮半島から伝わりました。

この土器2点は、写真右が武蔵国衙跡の南側隣接地区、左が武蔵国衙跡南西の国司館（御殿地）地区から出土したものです。ともに壺の口縁部分の破片で、口径は右が約16cm、左が約13cmと推定されます。

この土器2点が注目されるのは、市内で発見された他の須恵器には見られない鋳のような突帯をつけた形であること。そして、写真左の土器が他の須恵器とは異なって、きめの細かい特有の粘土で作られていることです。

さらに、この土器2点を詳しく観察した結果、直立する口縁の上端部に鋳状の突帯を付け、その上に少し内傾する直立の口縁を足して作られていることが判明しました。独特の技法です。

このような技法で作られた土器の事例を探索すると、須恵器自体の製作技術と同じく古代の朝鮮半島にたどり着きます。3世紀後半から5世紀前半の朝鮮半島西側で、百済の領域またはその影響下にあった地域では、二重口縁壺と呼ばれる土器があり、この土器は墓への副葬や祭祀にも使われました。そして、この二重口縁壺の口縁部が府中市内の土器2点と同様の技法で作られているのです。

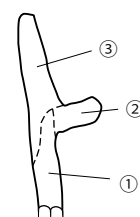
こうした百済地域の土器との関連性がうかがわれる土器が府中で確認されたのは、初めてのことです。また、この土器2点は、百済地域の墓や祭祀に供せられた土器と形態も似ていること、その出土地が府中崖線付近の限られた地域であることも大いに注目されます。

この土器2点は、製作地が不明ですが、百済地域の二重口縁壺の技法を継承していることからすると、5～6世紀のものと考えられます。出土地付近には、この土器を供えた墓や祭祀の場があった可能性も浮かびます。

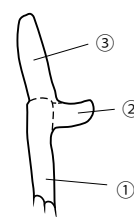
今回紹介した土器2点は、来年3月22日までふるさと府中歴史館で開催している特別展『府中の発掘お宝展』で展示しています。ぜひ、実物をご覧ください。



百済出土の二重口縁壺
(平凡社『世界陶磁全集 17』より)



写真左の土器



写真右の土器

土器の断面で見る成形順序



浅野長政隠棲地周辺の空中写真
(1947 年 米軍撮影 国土地理院地図・空中写真閲覧サービスより)

▼ 浅野長政の蟄居

戦国の世を生き抜いた武将・浅野長政^{ながまさ}をご存じでしょうか。豊臣秀吉に甲斐^{かい}21万5000石を与えられて甲府城に入り、奥羽^{おうう}・関東支配^{いちよく}の一翼を担い、豊臣政権の五奉行にも名を連ねた武将です。秀吉の信任が厚いばかりでなく、徳川家康とも親交を結び、秀吉亡き後の関ヶ原の戦いでは家康軍に属し、戦いの後は隠居^{いんきょ}して常陸真壁^{ひたちまかべ}・筑波両郡などを与えられ、65歳で生涯を閉じました。

このように戦国の世を生き抜いた長政ですが、彼^{いんせい}が隠棲したと伝わる地が府中にあります。白糸台^{しろいと}5丁目にある東京都旧跡「浅野長政隠棲の地」です。

秀吉死去後の慶長4年(1599)10月、長政は石田三成^{いしだせいざう}の謀略で家康暗殺の嫌疑をかけられ、家康から甲府蟄居^{ちつきよ}を命じられてしまいます。この時なぜか、府中で蟄居^{けいちよう}していて、その地が上の伝承地なのです。もっとも、この後の関ヶ原の戦いでは上述のように家康軍に属し、変わらぬ信任を得ていて、蟄居の期間はわずか1年足らずのことのようです。

▼ 長政の隠棲地は方形館

隠棲の伝承地は、かつては東西54間^{けん}(97m)、南北67間(120m)で、高さ9尺(2.7m)の土塁^{どるい}が巡^{めぐ}らされていたといえます。方形のけっこう^{しゃく}大きな館^{やかた}が残されていたのです。

この土塁は明治以降しだいに切り崩され、今は西辺の一部を幼稚園の一面に残すにすぎません。しかし、かつての様子は、古い空中写真によってうかがうことができます。国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスを見ると、1947年米軍撮影の1枚が最も写りが良いようです。

上の写真がそれです。崖線^{がいせん}際に屋敷が点々と並ぶ一方、右上をかすめる甲州街道^{こうしゅうかいどう}沿いには短冊形^{たんざく}の家並も確認できます。崖線下には水田が一面に広がっている様子もわかります。戦後間もない頃の田園風景^{しの}を偲ぶことのできる写真です。

それはともかく、京王線と段丘崖^{だんきゅうがい}に挟まれた写真中央にある、方形に木立^{こたち}が巡^{めぐ}っているところが伝承地です。この木立は土塁の位置を示しているとみてよいでしょう。現行の地図にこの空中写真を投影すると、一辺100m内外であることが確認でき、言い伝え通りの方形館^{ほうけいかん}の存在が確実視

できます。

▼ 発掘された伝承地

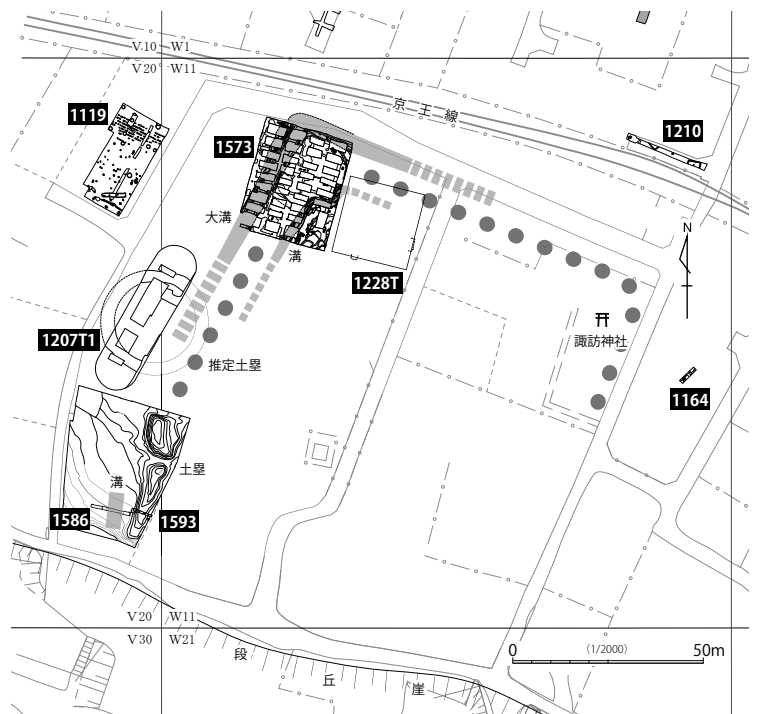
実は、伝承地では発掘も数回行われています。残存する西辺土塁の北側で、方形館の北西隅付近にあたる地点の発掘では、土塁そのものは跡形もなく削平されていましたが、その外側に上幅 5～7m、深さ 1.5m もある大溝が見つっています。堀といってもよい規模です。さらにその内側には、並行して上幅 2.5m、深さ 0.5m の溝も見つっています。2 条の溝は 8m 離れていて、これを南に延長すると、ちょうど残存する西辺土塁の両側に位置します。したがって、溝の間には、本来、土塁が構築されていたものと判断できます。

また、残存する土塁も測量調査が行われ、一部、発掘もされています。その結果、現存する土塁の盛り土は近代以降の遺物を含んでいることがわかりました。必ずしも構築時の状態をとどめておらず、当初の高さは不明というほかありません。しかし、基底部の幅は 5～10m であることが確認されています。

このように、発掘や測量調査によって、長政隠棲の伝承地は、具体的な姿を現してきたと言ってよいでしょう。

▼ 方形館はいつできたか？

しかし、この方形館は長政が構築したものなのでしょうか。江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』は、方形館の北東隅にある諏訪社を紹介するなかで、諏訪因幡守の屋敷跡とする伝承



浅野長政隠棲地周辺の発掘状況（数字は市内の調査回数）

を載せています。長政以前の館の主とみるべきでしょう。

発掘調査では、わずかですが陶磁器類が出土しています。ただ、13 世紀前半頃の常滑の鉢、1400 年前後の古瀬戸の香炉、15 世紀後半の常滑の鉢、17 世紀中頃の瀬戸の輪奘皿などで、長政隠棲の年代にぴったり一致するものはありません。13 世紀に土地利用されていたことは驚きですが、方形館の構築年代としては中世後期の 15 世紀頃とみるのが妥当でしょう。

その性格については、まだまだ考古学的な情報が不足している状況ですが、館の規模と関東各地での発掘事例を勘案して、地域の土着的な侍層の屋敷であったと考えたいところです。

ようするに長政は、中世後期の土着的な屋敷を一時的に占拠したか、そこに寄寓したとみるべきなのです。

しかし、乱世を生き抜いた浅野長政という武将が、蟄居の地としてここを選んだ理由はわかりません。それを知るには、当時の江戸や府中をとりまく社会情勢を読み解く必要があるでしょう。



諏訪神社東側の土塁（1967 年撮影）

府中の身近な

昆虫絵巻



⑦ テントウムシの冬眠と夏眠

昆虫は、周囲の温度により体温が変わる^{へんおん}変温動物です。ゆえに寒い冬では、ほとんどの種類で活動が停止します。とは言え、ここで命が尽きるわけではありません。暖かい春を迎えるために、色々な場所、あるいは様々なスタイルで冬をやり過ごす術^{すべ}を駆使するのです。

一年前、本シリーズの「③蝶^{ちよう}の冬越しフォーム」の中で、身近な蝶^{えつとう}の越冬方法を紹介し、種類によって越冬形態が異なることを説明しました。蝶と同じく、他の昆虫もその越冬手段は様々です。カマキリは木の枝や草^{くさ}の茎に産み付けた卵で冬を越します。バッタやコオロギも温度変化の少ない土の中に卵を産んで寒さ^{さむ}を凌ぎます。その他、カブトムシやセミなどは幼虫で過ごし、紹介済みのアゲハチョウなどは蛹^{さなぎ}の形です。今回は、身近な昆虫の中でも小粒なテントウムシに注目します。

テントウムシは、枝先などで行き場を失うと飛び立つ習性を持ち、これが太陽に向かって飛んでいく様を想起させ「天道」と称されました。名前はここから付いたようです。その種類は多岐にわたりますが、特に私たちの近在に生息する有名な種は、ナミテントウとナナホシテントウでしょう。両者ともアブラムシ^{てんとう}の天敵であり、成虫も幼虫もこれを餌^{えさ}にしています。当館梅園のウメに付くアブラムシも退治してくれる益虫^{えきちゆう}というわけです。

さて、冬の過ごし方ですが、まずナミテントウは、11月半ばから下旬にかけての暖かい晴れた日に群れを作って飛び立ちます。その数は数十から数千匹にも及びます。移動先は目立った樹木や白っぽい岩、さらに市街地の建物などです。これがナミテントウの集団越冬で、見通しが良く日当



りに優れた場所を選ぶための行動なのです。呼吸によってわずかな熱と湿気が発生するため、集団を形成することで互いに空気に接触する面積を減らし、熱の拡散を防ぐわけです。面白いのは、その集団が一度気に入った場所には、毎年同じように集まることです。越冬した成虫は、春に活動を再開し、交尾・産卵します。そして夏前には新たな世代^{こうび}が羽化して、さらにこれらも夏から秋にかけて産卵し、次の世代が誕生します。このように次々と誕生した個体が入れ替わり、冬を越していくのです。加えてテントウムシの寿命は約2～3年と短く、決して同じ集団^{ぐん}が毎度の冬を迎えるわけではありません。越冬毎に、大半が次世代で構成された成虫の群れが飛んで来るのです。こうした集団が、教えられてもない親世代と同様の越冬場所を選ぶのは、大変不思議な行動です。残念ながらこのメカニズムの理由は、よくわかっていません。

ナナホシテントウの越冬^{いた}は至ってシンプルです。生息地周辺の枯葉や植物の根元^{ねもと}などに身を寄せて寒さに耐えるスタイルです。天気の良い暖かい日には、草むらで日向ぼっこをする様子も見られ、完全な休眠^{きゅうみん}状態ではないようです。単に低温期の活動抑制^{よくせい}に過ぎず、ナミテントウより

寒さに強い性質なのでしょう。さらには集団ではなく、せいぜい2～4匹程度で過ごしています。

反して、夏は数十匹の集団を作り、交尾も産卵もせずに呼吸量^{いぢじろ}は著しく低下します。ここで休眠状態に入り活動が停止してしまうのです。ナミテントウも夏は不活発になるものの、ナナホシテントウの越冬同様、これは単なる抑制です。身近な2種のテントウムシは、このように休眠時期が逆転しているのです。ナナホシテントウが夏に餌不足となる草原や畑で生活するのに対し、ナミテントウは樹上で生活し、夏でも餌のアブラムシが捕れることから、こうした生態リズムが生じているのかも知れません。ナナホシテントウも樹に上れば餌があるのに……これまた理由は不明です。ナナホシのナナホシギ（七不思議）では？と言ったら笑われてしまいますね。（中村武史）

ご臨終～江戸時代の死・病・あの世～

1/25（土）～3/8（日）

会場：本館 1 階特別展示室

「臨終」とは、仏教用語の「臨命終時」の略語で、人生の終りに臨むことを意味します。古来より人々は、身近な人の死を受け入れ、自分の人生の終焉と向き合ってきました。その捉え方は時代によって変化しますが、この展示会では江戸時代の府中に暮らした人々が残した史料から、当時の死生観やあの世観について考えてみたいと思います。

まずは江戸時代に至るまでの流れを見てみましょう。平安時代の後期には戦乱などによる社会不安とともに、仏法が衰え世の中が乱れるという末法思想が貴族社会に浸透しました。厭世観に捕らわれた人々は、極楽浄土への憧れを強めていきます。その後、14 世紀後半頃を転機に、人々は極楽往生よりも現世での安寧を求めるようになりますが、これは同じ頃、家の存続という意識が形成され始めたこととリンクしているのかもしれません。このような傾向は、当時の葬送や供養のあり方にも影響を及ぼし、そこで生じた変化は江戸時代に受け継がれていきます。

さて、江戸時代になって約半世紀、17 世紀の半ばに、江戸幕府はキリスト教などへの禁教を徹底するために、全ての人を寺の檀家とする寺請制度を施行しました。この結果、寺院と檀家の関係が固定的になり、葬送や墓石、先祖供養などに一定のルールが生まれました。先祖は大切に祀られることにより成仏し、子孫を守る存在になると考えられましたが、このような意識は供養する人のいない死者を「無縁仏」として区別することに繋がりました。



墓地から出土した副葬品の六道銭と爛徳利（宮町 2 丁目・府中駅南口第二地区）
府中市教育委員会蔵



跡継ぎがいれば「無縁仏」にならないかという、そういうわけではありません。江戸時代後期には、家出や素行悪化を理由に現在の戸籍にあたる「宗門人別改帳」から名前を除かれ無宿となる人が増えていきました。また、旅先や出稼ぎ先で亡くなる人も少なからずいましたが、その多くが「無縁仏」として埋葬されたのです。もっとも、江戸時代にもあの世の存在を信じない人はいたでしょうから、そういう人たちは死後のことなど気にかけていなかったのかもしれません。

江戸時代が終りを告げてから、約 150 年。現在は医療や福祉の発展により平均寿命が延び、「人生 100 年時代」とまで言われるようになりました。その一方で、この半世紀における家族形態の変化は、かつて「無縁」と定義された人々を着実に増やしています。日々の生活や死後の埋葬に対する考え方も変わってきました。このような状況は、如何に生きるかということに加え、どのように死を迎えるかということ、私たちに問いかけているのかもしれません。

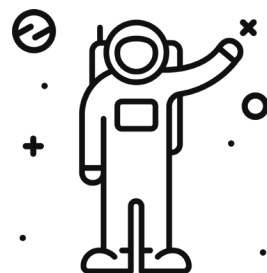
多くの人が自宅で生涯を終えていた江戸時代には、死は日常の中にありました。老若男女を問わず、突然襲ってくる病気は短期間に人々を死に追いやりました。この展示会では、そのような時代に生きた彼らの「死」「病」「あの世」に対する観念を通して、現在の生と死を見つめ直してみたいと思います。

（花木知子）

平成史に残る天文・宇宙イベント



③二度の火星大接近！



昨夏、怖いくらい明るく赤い星が夜空に輝いていたことを皆さんは覚えていますか？あれは火星です。2018年（平成30）は15年ぶりの「火星大接近」の年でした。“大”接近は平成の間、2003年（平成15）にも起こっています。平成を生きた皆さんは火星大接近に2回遭遇していたのです。

「火星が接近する」とはどういうことでしょうか？火星が地球とぶつかるわけではありません。火星は、地球のすぐ外側で一緒に太陽の周りを回る太陽系の惑星です。地球の方が回るスピードが速いため、約2年2か月ごとに火星を追い抜きますが、そのとき距離が近づいて「接近」が起こるのです。ほぼ円形である地球の軌道と比べて、火星の軌道は楕円形のため、軌道上のどこで接近するかによって距離が変わります。また、意外と知られていませんが、火星が最も地球へ近づく「最接近」の日だけでなく、長ければその前後数か月もの間、普段より明るい火星を見られます。

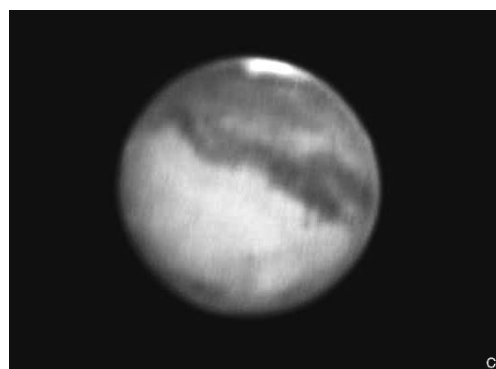
実は、火星“大”接近という言葉に明確な定義はありません。火星と地球の軌道が最も近い辺りでの接近を「小接近」、最も近い辺りでの接近を「大接近」と呼び、大接近はほぼ15年から17年ごとに起こります。火星大接近時は小接近と比べ、火星までの距離や見かけの大きさが倍くらい違うため、より明るい輝きを楽しめたり、地表の様子が望遠鏡で見やすくなりました。

2003年の火星大接近は、その中でも距離が近く約5,576万km、明るさはマイナス2.9等でした。「21世紀で最も接近！」など報道が過熱し、当館の観望会には史上最多の約900人が来場。10台の望遠鏡に真夜中まで並んでも見られない方が出るほどでした。中には「火星が月ぐらい大きく見える」と思い込んで望遠鏡を覗き「小さい！」とがっかりする方も…。

報道された言葉に誤りはないものの、実は望遠鏡での見かけの大きさは2018年の大接近時との違いがわからない程の差なのです。

昨年7月31日の大接近は約5,759万kmの距離、マイナス2.8等の輝きでした。当館の観望会は満員御礼となりメディアにも取り上げられました。しかし2018年の大接近は、偶然にも11年ぶりに発生した火星全体を覆う大砂嵐と重なり、期待されていた地表面の様子はほぼ見えないという結果に。ただ、肉眼での見え方には影響なく、明るい輝きを堪能できました。次の大接近は2035年9月11日。距離約5,759万kmまで近づいたマイナス2.8等の火星を見られます。

ところで、火星の英名「Mars」はローマ神話の戦いの神マルスに由来します。2020年（令和2）は世界中の選手がマルスのように力強く競い合う東京オリンピックの年ですが、令和最初の火星接近の年でもあります。最も接近するのは2020年10月6日。約6,207万kmと2018年より少し距離は離れますが、肉眼ではほぼ変わらないほど明るく輝くマイナス2.6等の火星をみることができます。平成最後の大接近に見づらかった地表面の様も、令和最初の接近ではくっきりと見られるように、今からお祈りしておくことにしましょう。（相澤南美）



2003年火星大接近のころの火星
提供：国立天文台